

どっかい生きてます!



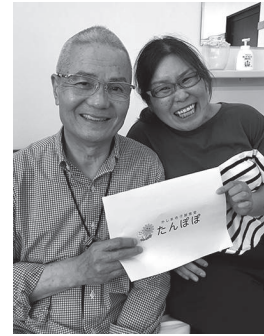
台風の影響で少し遅れましたが、今年も潮騒ジョブトレーニングセンターでは、昨年よりもさらに耕作面積を拡大した潮騒水田のコシヒカリが豊作となり、9月半ば過ぎから農業隊が機械を使って稲刈り作業に励みました。一部は行方施設の駐車場で、おだげ(稲掛け)にされました。昨年から取り組んでいる本県特産の納豆容器に使う、藁苞(わらづと)用の稲わらに加工するためです。このように就労支援の潮騒農業に厚みが増えました。

2019

9

目指すは

寺子屋兼ねた子ども食堂



「るみの家」で活躍するめいさんと
栗原センター長▶

今年2月の潮騒通信でも少し触れていますが、鹿嶋市内で営業する潮騒ジョブトレーニングセンター(JTC)が自前で整備した潮騒食堂「おらげのかまど」の2階に、念願の子ども食堂が完成します。かしま寺子屋食堂「たんぽぽ」として10月オープンを目指して準備を進めています。子ども食堂の構想は約4年前の新聞記事がきっかけでした。「飽食の時代」と呼ばれる現代社会に「食事に窮している子どもがいる」という事実に関心をもち、記事を読み、切り返し、「いつかはお手伝いしたい」と構想を温めていました。幸い潮騒JTCには就労支援を兼ねて農作業に従事する農業隊が食材のコメや多品種の野菜を栽培しており、障害者総合支援法に則った就労支援事業所として営業する潮騒食堂にも多くのスタッフが育っています。潮騒食堂の2階で一部営業していた店舗の閉店をきっかけに「空き店舗3軒分をまとめて使いませんか」という話が持ち上がり、引き受けました。当時、1階には食事を作るキッチンもあり、ここなら子ども食堂ができるのではと思ったのです。

2歳のころに戦争で父を失った私は、温かな食卓を囲む家族団らんの記憶がありません。子どもにとって楽しい食事は、お腹を満たすだけでなく心を養い、生きる力になります。体と心の栄養を蓄えることにも繋がるはず。時代の移り変わりとともに家庭の在り方も変化しつづき、生活困難を抱えた家庭も増加傾向にあるようです。私は貧困と食糧難の時代を生き抜いてきましたが、飽食の時代に食べられないというのは考えられません。今の時代、社会の仕組みとして子どもが犠牲になることだけは避けなければなりません。寺子屋食堂は、一緒に食べる家族がいない「孤食」や、家族がばらばらに食事をしている「個食」を防ぐ手立てにもなります。子供だけではなく、独り暮らしの高齢者もテレビを相手に寂しい食事をしているはず。食費に困窮する家庭もあります。低料金で栄養のある食事をしてもらうのが、この食堂の大きな目的の一つです。子どもと高齢者が交流しながら食事をすれば、それらの問題は一挙に解決します。

もう一つの目的は、子どもたちへの居場所の提供です。社会問題にもなっている家庭内で虐待に晒(さら)されている子どもたちだけでなく、日中保護者がいない家庭の子どもたちを預かる児童クラブなどにもなじめない「生きづらさ」を抱えた子どもたちが気軽に集り、遊び・学ぶことができる居場所になれば最高です。寺子屋食堂の壁には、図書をいっぱい並べられる書棚も作りました。既に市内の小中学校を見学させてもらい、図書館の運用についても検討しています。子どもたちの宿題や課題のお手伝いができるスタッフも揃(そろ)えられたらと思っています。

子ども食堂を支援する民間団体が今年6月に発表した子ども食堂の数は、日本全国に少なくとも3,718か所(5月現在)あり、昨年(2018年)の調査 2,286か所から約1.6倍増え、利用者は推計で延べ160万人に上るそうです。食堂の利用形態はさまざまありますが、子どもと大人たちを繋ぐ地域交流拠点として寺子屋食堂を有効活用できるように市教育委員会や社会福祉協議会など関係機関と連携・協力しながら運営していきたいと思っています。

(センター長 栗原 豊)



潮騒 人間塾

「就労サポート・のだ」
工藤 達(たつる)さん

就労支援の
新たな認知プログラム

第3回となる潮騒人間塾が8月10日、エアコン設備が導入されて間もない鹿嶋市宮中の潮騒アディクションビレッジ会館3階で行われ、講師の方々から就労支援事業に取り組む潮騒JTCにとって、参考となる貴重な助言を頂くことができました。講師を務めたのは、千葉県野田市で幅広い障害者福祉サービス事業を展開する社会福祉法人は一とふる・就労移行支援事業所「就労サポート・のだ」で、サービス管理責任者を務める工藤達さん（精神保健福祉士、社会福祉士）と、同市の「NPO法人・メンタルサポート野田そよかぜ」（相談支援センターそよかぜも運営）の相談支援専門員、堀口美千代さん（社会福祉士、刑事司法ソーシャルワーカー登録）の二人で、この日は工藤さんがメインとなってパワーポイント映像を使いながら、日頃取り組んでいる就労支援活動を分かりやすく話していただきました。

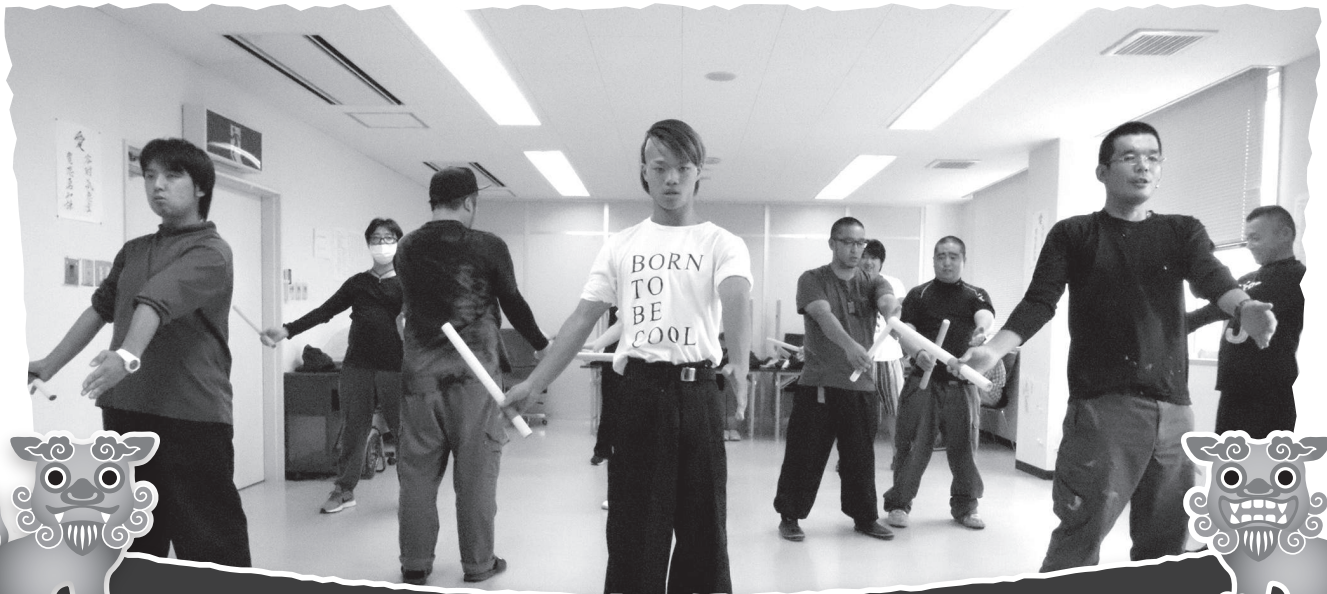
人間塾講話で工藤さんは、野田市で唯一の就労支援施設「就労サポート・のだ」で、主に精神障害者の就労移行支援で効果を発揮しているという、新しい認知プログラムにポイントを置いて、その概要を現場での実践体験と詳しいデータを交えて体系的に解説してくれました。「私たちは特別なことをしているのではなく、日頃やっている働くための訓練の合い間に、ほんの少しだけ認知行動療法と認知機能リハビリテーションと呼ばれる新たなトレーニング手法を盛り込み、就労支援活動に伴うストレスの発散や軽減、体調の安定化などを図っています」として、依存症を主体とする就労支援に力を入れる潮騒JTCにも応用できるサポート体制づくりで、とても参考になるヒントを与えてくれました。

工藤さんは障害者が働くことの意味を幅広い視点か

ら問いかけながら、体調の安定化とストレスへの対応が求められることを踏まえ、これに有効な就労支援プログラムの新たな手法（メタ認知トレーニング）について、図式化したダムの機能やパンジーの花の例え話などを使いながら、興味深く解説を加えました。講話が一通り終わると、入寮者からも盛んに質問があり、工藤さんは「みんなで助け合える、困った時には相談できる、自信や自尊心を持つ、繰り返してトライできる」など就労支援の大事なポイントを指摘し、このプログラムには仲間の支えが重要になることを示唆しました。

この認知プログラムにより同所の就労定着率は100%（2018年度、期間雇用を含む）の高実績を誇り、「自分に合う仕事が見つかった」「生きることが楽になった」など利用者に好評のようです。工藤さんは「依存症施設の潮騒JTCでも12ステップと認知プログラムをうまく組み合わせることで、潮騒らしい就労支援の形を」と期待を寄せました。

今回の人間塾講話は、潮騒が取り組む就労継続支援B型作業所やグループホームに入寮者を促して頂いている堀口さんの尽力で、工藤さんの登場となった次第です。堀口さんは受刑経験者のケアにも造詣が深く、潮騒でも貴重な助言を頂いています。この日も最後に「福祉とは人が人を支えること。潮騒JTCでは周りの人が本人を支えて、入寮者の育て直しができている。時には農場にも出ていき、人との触れ合いで成長している。過去は否定するものではなく、それをバネに価値に変えていくことができる。過去から逃げるのではなく過去から学ぶことが大事。その意味でも、行き場がなくホームレスとなって社会から孤立している人にも手を差し伸べてくれる潮騒の懐の深い障害サービスの取り組みに感謝します」と締め括りました。（市）



エイサー・プログラムが始まりました

潮騒エイサープログラムが本格始動——。潮騒 JTC のデイケア・プログラムに、新しく「エイサープログラム」が組み込まれ、これまでのエイサー隊だけによるレクリエーション活動の一環としての取り組みから飛躍することになりました。その第1回練習が9月11日潮騒アディクションビレッジ会館4階会議室でありました。

ヒトシさんによれば、今回のプログラム化への取り組みは潮騒エイサー（鹿嶋琉球太鼓）を取り巻く状況の変化があるようです。既にレクリエーション・プログラムとしてはしっかり定着して久しいエイサー活動ですが、これまでの地道な取り組みがここにきて大きく花開き、近隣地域を中心に出演要請が大幅に増えました。最近では行政からも熱い視線を受けるようになりました。その結果、参加メンバーの向上心や達成感につながり、承認欲求が満たされるなどメンタル面での効用が大きく、またチームワークなので仲間との絆が深まる相乗効果を生んでいます。施設側も、早くから太鼓などの器材や衣装をそろえるなどして下支えしてきました。そうした施設を挙げてのバックアップから、今やエイサーは潮騒の「顔」として施設PRにも貢献しています。

基本的に男女混合で構成するエイサー隊のベテランメンバーは、農業隊などで中核的な役割を果たしており、当事者スタッフとしても忙しい仕事を抱えています。それでも定期練習を欠かさずに一定の水準を維持しながら、外部からの公演要請にもできる限り応えています。しかし、参加人数が限定されているのに加え、施設の宿命として入寮者の出入りが避けられな

いことから、固定したメンバーでエイサーチームを組み、技量が上達しても抜けていくメンバーがおり、さらに増え続ける公演要請にどうしたら応えられるか、頭の痛い課題でした。その一方で、県内にはエイサーに取り組む団体はごくわずかなだけに、潮騒エイサーには熱い視線が寄せられるようになりました。

これら課題の打開策として今回、エイサー活動をデイケアの新たなプログラムに加えることが打ち出されました。施設内におけるエイサー愛好者のニーズに応えながら、メンバーの安定確保が悩みだった潮騒エイサー隊に加わる新たなメンバーの登場が期待されます。ヒトシさんは「基本はデイケアのプログラムなので無理せずにエイサーを楽しむこと。施設生活の息抜きに利用してもらってもいい。でも技術の習得には個人差あり、うまくなれば当然発表会などに出たいという意欲が生まれる。その受け皿がエイサー本隊で、これにもベテランと新人メンバーとでは技量の差がある。新人のカイト君なんかは約1か月で覚えた。1軍、2軍というわけではないが、レベルに合わせたチーム編成で柔軟に対応したい」と話しています。

初回の練習では約1時間半ほど、ベテランメンバーの指導で基本となるバチの持ち方や振り下ろし方などを繰り返し練習しました。その後で実際に曲を流して、基本となる動きについて具体的に指導を受けました。参加者らは「楽しみが一つ増えた。フォーラムまでには基本をマスターして舞台に立ちたい」「疲れたけど、早くエイサーが踊れるように自主練習にも力を入れたい」などと意欲をのぞかせていました。(み)



山武地区保護司会が研修視察で潮騒に来訪 映像と職員・スタッフ講話で依存症への理解深める

千葉県東金市の山武地区保護司会東金支部(松崎正幸支部長)が9月3日、鹿嶋市宮中の潮騒アディクションビレッジ会館に来訪し、潮騒JTCの紹介ビデオや説明用スライド、職員・スタッフの活動報告を通して潮騒の活動内容や依存症問題への理解を深めて頂きました。来訪された一行は更生保護女性会のメンバーや随行の市職員を含めた男女約20人で、日頃から元受刑者の皆さん方の社会復帰を下支えし、薬物・アルコール・ギャンブル依存に関係する保護観察期間の人たちとも接していることもあり、熱心に映像を視聴し講話に耳を傾けていました。

一行が研修の主眼としたのは、①入所・通所サービスの概要について ②回復プログラムについて ③潮騒独自の職業訓練・就労支援の在り方 ④その他(犯罪者に対する支援活動)などで、あらかじめ施設側で用意した潮騒JTCの事業案内やパワーポイントのレジュメ(発表内容)、潮騒通信の最新号(8月号)などの配布資料を見ながら、主に視覚に訴える形で約1時間半ほど濃密な座学研修をして頂きました。時間の制約から十分な質問時間が取れず、映像を通して皆さんの興味・関心が高まったものの、各現場を回って入寮者の活動の様子を視察見学する時間を確保できなかったことが、今後の反省点となりました。とりわけ一行は潮騒JTCが力を入れる潮騒エイサー(鹿嶋琉球太鼓)の取り組みに、新鮮な驚きを持たれた様子でした。

この日は、まず栗原センター長が歓迎あいさつ。「私は少年時代からやんちゃをしていたので保護司の先生にはずいぶんとお世話になった。結婚式にも参加して頂いた思い出がある。親の愛や優しさに飢えていたの

を埋めてくれたのが保護司の先生だった。私が求めていたものを受け入れてくれ、本心から甘えられる人だった。そんな私の体験からも、大変な役割を引き受けていると実感している。今も潮騒では受刑経験のある仲間たちの回復支援で、地元の保護司さんには大変にお世話になっています」と日頃の活動をねぎらいました。

研修では潮騒JTCの紹介オリジナルビデオを上映した後、職員のタチさんがパワーポイントの映像を使いながら潮騒の活動全般を報告。さらに、高齢者介護サービス「百寿」代表のマコトさんが当事者としての回復体験を踏まえ、学校講演で使っている資料映像を基に主に薬物依存症について説明し、「クスリやアルコールは家族など大切なものをすべて奪い、当事者を独りぼっちにさせる。そうならないためにも健全な家族関係や周囲のサポートが大事になり、私の体験からしても、保護司さんの果たす役割は大きいです」と日々の活動に期待を寄せました。

引き続き、原田事務長から潮騒の事業活動について説明があり、「現在、NPO法人の潮騒では200人を超える入寮者を、職員約30人と回復途上の当事者スタッフ十数人の体制で支えています。なかでもクリニックと連携した回復プログラムに取り組めることが潮騒の強みです」と強調しました。最後に事業グループ長で農業隊リーダーのヒトシさんが説明用スライドを使って農業を主体とした取り組みを解説しました。参加者からは「施設規模の大きいのと充実したプログラムに驚いた」「潮騒のエイサーを実際に見てみたい」などの感想が聞かれました。(市)

近藤恒夫さんメッセージ

失敗しても やり直せばいいじゃないか

第3回 ロイ神父との出会いが
自分の回復を目覚めさせた



アル中の変なカトリック神父との出会い

(前回) 薬物依存からの回復には一緒に歩いてくれる人が必要なんだ、と言ったけど、俺にとっては回復人生の同伴者だったロイさん(ロイ・アッセンハイマー神父、2005年に死去)が、まさにその人だった。

ロイさんはアメリカ人で、カトリックの米国メリノール宣教会(本部・ニューヨーク)から布教活動で日本に派遣されていたんだが、異国での慣れない孤独な暮らしがストレスとなり、酒におぼれアルコール依存症を発症してしまった。一時帰国してミネソタ州にある神父のためのリハビリ施設で治療・回復し、再び来日して主に北海道で活動し、札幌にマック(MAC=メリノール・アルコール・センター)を設置し、のちに帯広にも開設するなど熱心に活動していた。

とにかく型破りな聖職者だった。俺には単なるスポンサーの枠を超えた人生の師であり、資金面でも大いに助けられた。ロイさんがいなかったらダルク(DARC=ドラッグ・アディクション・リハビリテーション・センターの略称)は生まれていなかったよ。だから俺には、亡くなった後も足を向けては寝られない存在なんだ。

ロイさんは自分自身がアル中だったから、自助グループ(AA=1935年に誕生した米国のアルコール依存症セルフヘルプグループ、日本では1975年に始まったとされる)の普及に熱心だった。当時日本には薬物依存症の自助グループはなかったけど、回復の原理は同じだからと再来日して間もなく、俺が入院していた札幌市内の精神科病院にやって来てはAAへの参加を促した。アル中だけでなくヤク中も同じ仲間として回復を支援してくれたのが、俺にはよかった。

その病院で初めてロイさんに会ったんだが、何となく

不思議な親近感を持ったことを覚えている。でも俺は「変な神父だな。どうせ布教目当てなんだろな」って、彼の話には少しも聞く耳を持てなかった。AAミーティングなんて何になるんだ、と無視していた。でもな、俺はそのAAに助けられるんだから、世の中は先が分からない、まさに明日はミステリーだ。

「やめろ」と言わずに4万円貸してくれた

俺は相変わらず看護師の目を盗んでは、病院内のトイレでシャブを打っていた。まだ自力で覚醒剤をやめられると思っていたからね。その病院には3、4カ月ぐらい入院してたかな、でも、退院しても思うに任せない状態だった。さすがに「これじゃどうしようもないなあ」と思い始めた頃に、(前回触れた)俺がシャブ中にした船会社時代に部下だった若いヤツと一緒に使って逮捕されるんだけど、当時は逮捕されてもそのまま拘留されずに帰宅が許されていた。

で、その足で俺はロイさんを訪ね、4万円を借りた。ロイさんは「何に使うのですか?」と聞くので、「シャブを買う」と答えたら、「それは面白いですね」って貸してくれた。普通、シャブを買いたいから金を貸してくれって言われても貸さないでしょ? しかも神父なのに。その時も「なんでやめろって言わないのかな? おかしな人だな」と思ったけどね。てっきり断られるだろうと思っていたから、あの時はとても面食らったね。

それまでいろんな出会いがあったけど、「やめろ」って言わなかったのはロイさんだけだった。今考えると、あれって欧米人らしい対処の仕方、新しい回復指導のスタイルかもしれないよ。今も裁判所や警察や家族は「とにかくダメだからやめろ」の一点張り。俺たちからすりゃ、そんなふうに「やめろ」って言われたら、「やめりゃいい

んだろ、やめりゃ」って余計にふて腐れるだろ。それで終わりだよ。その先を自分の頭で考えようとはしないよな。

でな。ロイさんは、いつもこう言うんだよ。「近藤さん、よろしければミーティングに行きませんか?」って。「よろしければ」だよ。こっちはシャブやりたいから、よろしくないわけだ。ふつう家でぶらぶらしてたら、「またクスリ使うようになるからミーティングに行けよ」って上から目線で言われるんだけど、へそ曲がりのヤク中は反発するだろう。違うんだよ、ロイさんは。やんわりとこっちにボールを投げて、「行く行かないは、あなた次第。あなたの選択肢なんですよ」ってこっちに判断をゆだねる。決して無理強いはいしない。

日本とは異なる精神文化の違いを感じる

さっきの「やめろ」と言わない態度と考え合わせると、「やりたきゃやればいいんじゃない?」ってというのは、「あなた自身の問題だよ」という問い掛けにつながるんだよな。「それをあなたが選ぶのなら、あなたの責任だよ」っていう形で、責任をこっちに返される。初めてそこから自分で考えるという態度が生まれるわけだ。「やる」か「やらないか」の選択だよな。「どっちを選ぶかはあなたが決めることでしょ? 誰も決めてくれませんよ」ってこと。あなたの責任において、「よろしければおやりなさい」ってことですよ。

俺は人に命令するのもしられるのも嫌いだけど、もし人から命令されたら、失敗したときに「俺が好きでやったわけじゃなくて、あいつらがこうしろって言うからやったんだ。だから俺には責任がない」とか開き直って、いつでも逃げられる。責任転嫁できるじゃないですか。でも自分で選択したら自分の責任でしょ。そういう意味では新しい言葉だったな。裁判所でもこんなふうに促せば本人の心に響くのになって思うよ。今でも、すごく新鮮な響きを持つ言葉だよな。

つまりロイさんはそれほど人間理解に秀でた人だったんじゃないかな。人間の分からなさというか不思議さをよく理解し、アディクトの気持ちや感情の機微をよく踏まえているんだな。それはロイさんが依存症の当事者だからっていうのも当然あるんだけど、キリスト教的な慈愛に満ちた精神風土というか、そうした家庭環境に育ち、早くから神父を目指した人だから、博愛的な資質に裏打ちされているように思うんだ。

依存症の回復は個人の自立の問題に帰すとしても、「あなたがやる気があるなら、本気で立ち直りたいんなら、それをみんなで支え合いますよ」「失敗してもみんなで

助け合いますよ」という温かいメッセージなわけだ。長年付き合った体験から、俺はそう思う。ロイさんの、ものの言い方ひとつにも俺は日本とは異なる精神文化の違いを意識させられた。「ああ、この厚い壁はなかなか超えられないなあ」ってな感じだったな。

目障りだから目の前から消えろ!

だけど日本は違うだろ、俺にいわせりゃ何かというところを絡めて「連帯責任だ!」となる。なんでもかんでも横並びが好きで、個人の判断なんかよりも集団の利害、集団の利益を守ろうとする。個人のこともコミュニティの方が大事、社会防衛が優先される国なんだな。だから個人を救済するという発想は生まれにくい。そこからこぼれ落ちたり、歯向かったりするやつは容赦なく切り捨てる。コミュニティから逸脱するやつには容赦なく掟(おきて)破りのレットルを張って追放する。

だから薬物事犯に対しては、とにかく監獄にぶちこめ、隔離しろ、目障りだから目の前から消えろ、と。まるで島国根性のDNAが草木一本まで染み込んでいる感じがする。犯罪者だからと断罪するだけで、「そうなのはお前が悪いんだ。好きでクスリ使って罪を犯したんだから、自分で罪をつぐなえ!」と突き放すだけ。フォローがないんだよ、この国は。すべてを犯罪者だからという価値判断で一括りして、「自己責任だ!」となる。

薬物絡みの事件で、裁判所で有罪になって服役しても刑務所を出た後に治療につながる仕組みがないから、受刑者はすぐ再犯してしまう。出た後に治療か、元のようによく生活に戻るか。でも、治療につながる仕組みがないから、元の生活に戻るしかない。俺だって札幌拘置所を出たとき、月3万円の安アパートの一室で、あのまま独りぼっちでずっと過ごしていたら、シャブをやめたいという固い決意なんか簡単に消し飛んでいたよ、そして間違いなく売人に電話してクスリ引っ張っていた。そしたら執行猶予が取り消されて、今度こそ刑務所行きだったろうな。

とにかくこっちは日々、決意がころころ変わるんだ。つくづく自分が情けないというか、当てにならないんだな。自分が自分を信じられないんだから、始末に負えない。「孤立と孤独の罫(わな)」にはまったらヤク中の決意なんてひとたまりもない。これを乗り切るには一緒に歩いてくれる仲間、同伴者が必要なんだ。あの時ロイさんが「よろしければ」とミーティングに誘ってくれたから、今の俺があるんだね。だから潮騒の皆さんも一緒に歩く仲間、自分のスポンサーや同伴者を持ってください。(次号に続く)

潮騒14周年フォーラムの 目玉はコレ!



潮騒墓、子ども食堂、
垣根を超えた討論 など

総括責任者の マコトさんが 直前PRメッセージ



皆さん、こんにちは。潮騒JTCの関連事業所、高齢者介護デイサービス「百寿」代表の加勢誠です。既報の通り10月20日(日)に鹿嶋勤労文化会館(鹿嶋市宮中)で「潮騒ジョブトレーニングセンター14周年フォーラム」が開かれます。私は潮騒JTCの仲間から推されて今回、フォーラムの総括責任者を務めています。開催まで1カ月を切り、準備作業に追われる忙しい日々ですが、本紙面を借りて少しでも14周年フォーラムのPRをさせていただきます。

通例ですと潮騒フォーラムは12月上旬(第1日曜日)に実施していますが、今年は会場としている鹿嶋勤労文化会館の確保がこの時期困難となり、そのため1カ月半ほど早い開催時期となりました。今年は節目となる来年の15周年記念フォーラムにつながる大事な時期でもあり、悩みながら準備を進めています。

こうした思いを踏まえ、14周年フォーラムの注目企画について触れます。まずは潮騒に関わる人すべての願いであった、仲間のための『潮騒の墓』の完成発表を予定しています。「潮騒通信」8月号で報じたように、潮騒JTCの合葬墓が建立され、引き取り手のなかった仲間たちのお骨が無縁仏にならずに納骨できるようになりました。栗原センター長が常々話すように「仲間は家族」です。潮騒JTCでは「最期は仲間で見送ろう!」と施設葬(お別れ会)を営んでいますが、悲しいことに引き取り手のないお骨は毎年、増えていく一方です。それだけに仲間が永眠

できる潮騒の合葬墓の建立は、栗原センター長の悲願でもありました。既報通り旧暦のお盆には開眼法要、合同供養、納骨式を行うことができました。フォーラムではセンター長の熱い思いや苦労話も聞けると思います。

次に、10月オープン予定のこども食堂の「しおさい寺子屋食堂『たんぼぼ』」の完成発表です。潮騒JTCでは依存症の根底にある地域社会からの「孤立と孤独」問題を無視できません。そのための取り組みの一つが「子ども食堂」への挑戦です。子どもたちの社会の中での居場所づくりはもちろん、フォーラムテーマである「共存・共生・歩み寄り」を実現する活動拠点として位置付けます。地域で孤立しがちのお年寄りも含めて「孤食」問題の解消を目指します。子どもたちの勉強の場、和気あいあいと食事を楽しめる場であるのはもちろんですが、世代を超えて地域のみんなが集まれる居場所・交流スペースを目指します。既成概念にとらわれず、いろいろなことにチャレンジできるスペースとして活用していただきたいと考えております。この件についても、センター長より話がありますので、お楽しみに。

さらに、これが今フォーラムの実質的な目玉企画になりますが、潮騒フォーラム初の取り組みとして、潮騒JTCと関わりのある司法・行政・教育各分野の方々とのディスカッションが、午後のメイン企画となります。聞きたくても聞けないような本音の話、さらには拡大する潮騒JTCの取り組み、これからの方向性の発表など、普段聞けない内容が期待できます。他にも潮騒のオリジナル紹介ビデオ・仲間の話・エイサー演舞・近藤恒夫さんの話・余興と目白押しの内容です。一人でも多くの方のご参加お待ちしております。来場者には特典として、お弁当&潮騒農場で採れた旬野菜を準備しております。女性ハウス「るみの家」で製作した手工芸品の販売もごさいますので、よろしくお祈りいたします。

10月20日、職員・スタッフ一同皆様のお越しをお待ちしております。鹿嶋勤労文化会館でお会いしましょう。

(マコト)

■ 仲間のロクさん逝く、どうか天国で安らかに

潮騒JTCの関連事業所である高齢者デイサービス「百寿」(鹿嶋市宮中)の利用者だった仲間の遠藤源吾さん(ロクさん、72歳)が、8月23日に永眠されました。ロクさんとは長いお付き合いになります。仲間に優しく、男気のある方でした。晩年は病気との戦いとなり、本人も辛そうにしておりましたが、デイサービスの午後に行っているシェアミーティングには積極的に参加され、亡くなる前日まで参加されておりました。声を発することが難しくなっておりましたが仲間の話に耳を傾けていた姿が印象的です。最後は安らかに眠っているようでした。先に天国に旅立った仲間たちと賑やかにミーティングをやっていることでしょう。ロクさんのご冥福をお祈りいたします。(百寿代表、加勢誠)





るみの家

家族面談の試み

前回に引き続き、女性ハウス「るみの家」メンバーの家族面談の感想です。潮騒では入寮者の回復と成長に合わせて、「埋め合わせ」(注：依存症の回復プロセスで、過去に当事者が周囲に与えた傷や負担を償う作業のこと)につながる家族関係の修復を大事にしています。

めい

姉からのプレゼントや 祖父に会えるサプライズが

私は8月23、24日に両親とのお泊り面会をしてきました。女性ハウスでは、6月から仲間たちの家族との面談が始まりましたが、その時はまだ私は与えられませんでした。でも、その後になって話が進み、今回会うことができました。実は私、初めはお正月に実家に…という話だったのですが、私は地元で犯罪を犯していたため、両親からいい返事がもらえず、今回になりました。

そこにはいろんなサプライズがありました。行き先を知らなかった私が、車に乗り込むとまず母から小さな包みを渡され、開けるとペンダントが入っていました。「お姉ちゃんからだよ」の言葉にまず驚きました。散々、迷惑をかけた姉に対し、私はなかなか埋め合わせもできず、それどころか恨みの感情さえありました。ここにつながり、プログラムをやっている中で、自分がしたことの大ささ、おろかさ気づき、去年の8月から姉に手紙という形で埋め合わせが始まりました。でも、1年経った今でも返事は来ていません。どこかで不安だった私にはうれしいサプライズでした。

そして、私は行き先を母に聞いたところ、それは私がとても行きたかったところです。母方の祖父(97歳)が今月に入ってから体調を崩していて、もしかしたら最後になるかもしれないという事で、会いに行ける

ことになりました。そのために連絡が入ったらすぐ動けるようにと、実家に泊まる事にもなりました。車中、私は不安と緊張でいっぱいでした。祖父が覚えているだろうか、どんな状態なのか…。

祖父を見た時、言葉が一瞬出ませんでした。小さくなり、やせていて、歩行器を一生懸命つかんで歩いていました。目はビー玉のように小さくなり、おむつもはいている様子でした。「じいちゃん」としか言えませんでした。祖父は私を見て「くっ」と言ったのです。小さい頃から祖父は私が行くと、必ず靴を買いに行っていたのですが、覚えていたのかもしれませんが。

それを皮切りにいくつも言葉を発していました。「大きくなったな」「お金は大丈夫か」。そのたびに私もすぐに返しました。しばらくした頃、「朋弥はどうしてる」と私の息子の名前を言ってきました。ちゃんとながっている事がわかり、うれしくなりました。祖父は変わっていたけれど、変わっていませんでした。私の心残りが一つなくなりました。亡くなった祖母にも5年ぶりにお線香をあげることができました。

みく

「ばあば」となつてくれる 孫がかわいくて

私は8月23日に娘と孫2人に面会することができました。今年で3回目です。去年は予定していた日に、孫が次々と熱を出し、結局会えずじまいでした。今年は大丈夫かな?と心配でしたが、面談場所には「お昼過ぎ頃着くよ」とメールがあり。一安心しました。

2年ぶりに会う孫2人は、上が男の子5歳で、下が女の子3歳ですが、あまりにも成長していたのでびっくりしました。個室のある飲食店で昼食をとり、その孫2人の騒々しさに手を焼き、でもだきしめたその温もりがあったかくて思わず「かわいい」と叫んでしまいました。娘には「自分の為に使いなさいよ」とお金を渡しました。娘は「また来年くるからね」と言ってくれて、遠路会いに来てくれて、本当にありがたいなと思いました。

「ばあば」となつてくれる孫がかわいくて、自分でも本心から「ばあばですよー」と言っている自分がいました。本当に短い時間だったけれど、楽しいひと時を過ごさせてもらいました。話すことは尽きませんし、孫の成長は早いですね。来年も会える日を楽しみにしています。そのためには、自分も健康で長生きしなくちゃ、としみじみ思いました。

60歳からの回復

NO67 (最終回)

新天地に地歩を固め
潮騒ジョブトレーニングセンターへ

潮騒JTCセンター長 栗原 豊

私の肝いりで神栖市内のアパートを拠点に、密かに産声を上げた新たな回復施設は世話になっている鹿島ダルクへの配慮から、どうしても遠慮がちで限定的なものにならざるを得なかった。新しいブドウ酒はこれにふさわしい新しい皮袋に盛るべきとする聖書の教えに習うなら、自分たちの新たな活動はやはり新天地で、周囲への気兼ねなく思い切りエネルギーを全開させたい。思うに任せない状況にもどかしさを感じながらも、一度固い扉をこじ開けた私の情熱とパワーは留まることなく、次の扉を目指す動きを加速させた。日々、仲間たちの支援で忙しく動き回るなかで、私は近隣地域に車を走らせながら、「この物件なら施設にふさわしいのになあ」と目配りした。だが、当時の私はまったくの手元不如意で金銭的な余裕がなく、アクションを起こすまでには至らなかった。

しかし、不思議なもので目標を持って精力的に動き回ると新たな人間関係が切り開かれ、向こう側から幸運がやって来た。ある時、私のパートナーになったルミの知人が、破格の条件で使える物件があると紹介してくれた。それは鹿嶋市役所前の、通りを挟んだ向かい側にある古いアパートだった。地の利がいいだけでなく、ミーティング場として使える一室もあった。まさに施設として使うにはもってこいの物件だった。私は迷わずに大家と契約し、苦労して資金を用立てた。アパート1階の3部屋を宿泊用のナイトケア施設に充てると、私と行動を共にする仲間たちが隣の神栖市から移ってきた。そして入り口には「鹿嶋潮騒ダルク」の看板を掲げた。神栖での活動開始から半年余り、私は心の中で「これは奇跡だよ!」とつぶやき、小躍りしたい気分だった。一方で、これから待ち受ける困難に立ち向かう自分を、「ここからが本当のスタートだ」と冷静に鼓舞した。

とはいえ私には新天地の鹿嶋に頼れる人脈はなく、当面の施設運営費の捻出に苦労していた。一方で、仲間たちが数人でやれる賃仕事のアルバイトを探

したり、施設に使う備品を調達したりと忙しく動き回った。そんな中で、仲間たちの移動に不可欠の施設車を旧知の支援者から好条件で入手でき、依存症者の回復には絶対条件ともいえる自助グループ (NA) の会場を、大洗や銚子、潮来など近隣地域の公共施設にOKをもらって確保するなど、着々と回復活動に必要な環境を整えていった。

こうして午前中は施設内ミーティングを開き、午後は体づくりやスポーツ・レクリエーション活動など曜日毎に幅広いプログラムを組み、夜間は自分たちで開拓した地域の各自助グループ・ミーティングに参加するという、依存症の回復施設としての生活パターンを確立していった。この流れが軌道に乗り始めると、主に隣県の精神科病院や自治体の福祉窓口からアルコール依存症を中心とした仲間が潮騒JTCに登場するようになった。

設立して間もなく予期していなかった名称問題が持ち上がったが、これも私が私淑(ししゅく)している近藤恒夫さんから「もうダルクの時代じゃない。これからは出口の問題が問われる。ジョブトレーニングで特色を見いだしたら」と、先見性ある助言で、現在の名称となった。この困難を乗り越えた経験は大きく、その数年後には私たちには手が届かないと思われた世界企業のファイザー製薬が主宰する市民活動プロジェクトに選ばれ、3年間にわたる資金援助を得て現在の就労支援の形を整えることができた。

その後は、自分でも驚くほど潮騒JTCの関連施設を増やすことができ、制度のはざままで苦しむ、行き場のない仲間たちに支援の手を差し伸べる活動を展開できている。思えば60歳からの再スタートで、新たな人生を切り開くことができたのも、潮騒JTCにおける仲間たちとのスピリチュアルな出会いと、ここ鹿嶋を中心とする鹿行地区の支援者・理解者の皆さんのお陰です。そうした恵まれた出会いに感謝の意を表して、これで連載を閉じます。ありがとうございました。(終わり)

受刑者 からの手紙

依存症を抱える受刑者にとって、満期出所となるとわずかの所持金だけで社会に放り出されるようなものですから、社会的なケアもなく厳しい現実が待っています。潮騒JTCは万全ではありませんが、やる気があればケアの要となる回復プログラムに取り組む環境は整っています。どうか門を叩いてください。

早くジョブの仲間と離脱への道のりを進むことを楽しみに

残暑お見舞い申し上げます。栗原センター長はじめ、シゲさん、ジョブの皆様。多忙な中、お変わりなくお過ごしのことと存じます。暑中見舞いや「どっこい生きてます!」を送っていただき、本当にありがたい限りです。社会からお手紙をいただけるのは、現在の自分にはジョブからのものだけとなり、とても感謝しております。どこかの人とつながっていただけると思えることの幸福感は、このような受刑生活を過ごしている中では、本当に励ましとなります。改めて、ありがとうございます。

自分の残刑は、2年7カ月と少しありますが、早くジョブの皆様と離脱への道のりを一步一步進むことを楽しみにしています。簡単なことではないと考えていますが、ジョブの皆様と一緒にあるなら苦しみながらも一日、一日を過ごしていけるのではないかと考えてきています。「どっこい生きてます!」を拝読していると、その思いが一層強くなります。まだまだ暑い日が続くと思われませんが、ジョブの皆さま、体調管理には十分お気を付けお過ごしくださいませ。自分も皆様に負けないように元気に過ごしていきます。10月20日には14周年フォーラムを開催とのこと。準備などは大変だと思いますが、潮騒通信での皆様の笑顔を拝見していますと、自分自身もなんだかうれしく思えてきます。頑張ってください。(秋田県 O・Y)

満期釈放なら帰住先をしっかり吟味しなくてはならない

拝啓、お手紙を頂きありがとうございます。栗原さんからのお手紙は初めての事で、熱心に拝読させて頂きました。残念ながら仮釈放のための委員面接はありませんでした。よって満期釈放が確定しました。しかし、逆に気持ちはとても軽くなっています。そこで帰住先をしっかりと判断するために下記の疑問点にお答えいただくと大変助かります。どうぞよろしくお願い致します。

▽満期釈放でも入所させてもらえるのか? ▽入所する日は、私の都合で自由に決められるのか? ▽入所するにあたり、金銭に余裕のない場合、受け入れてもらえるのか? ▽入所後、自分の都合で自由に行動したり、家族の看護をすることは可能なのか? ▽入所後、仕事をすることが可能か?(できるだけ早いうちに) ▽入所して旅行したり、リフレッシュするようなことは可能なのか? ▽貴施設で生活する場合、一日の生活はどの様に送るのか? ▽自分の目標や夢を自己実現するため、学校や大学に入学し、施設のプログラムなどへの参加が不可能になってもよいのか? ▽施設に入所後、仕事先や学校の環境により、退所しなくてはならない場合、可能なのか? ▽施設に入所する際、居室は一人部屋か? 共同室なのか? —以上の10点です。

社会復帰するにあたり、帰住先は私にとっても大切なことであり、44歳という年齢の事も考えると、もう失敗はできません。満期釈放なら、帰住先をしっかりと吟味しなくてはなりません。安易にお世話になる事で、トラブルを起こしてしまったり、ご迷惑をおかけするわけにはいかないので、前期内容の質問にご返信くださるよう、よろしくお願い致します。お忙しい中、私の為にお手紙を下さり、引き受けをして下さることは、私にとって本当に心の励みになり、とてもうれしいです。本当に有り難う御座います。(新潟県 H・H)

しおさい俳壇

9月のお題

立秋

選者 桐本石見

特選句

朝夕の
過ぎし易さよ今日の秋

ヒロ

今日の秋は立秋のことで、いよいよ暦の上でも秋になる感慨の言葉。近年は暑さも厳しく豪雨も多く何かと疲れるが、立秋と言う朝夕の風にも心安らぐ。「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」(藤原敏行)を思う句です。

特選句

コスモスに
心の和む潮来道

オノ

コスモスはメキシコ原産で明治の初め渡来した。秋桜とも言い、ギリシヤ語で美しい調和の意味や、哲学では宇宙も表わす。山口百恵さんの秋桜(コスモス)の歌で流行もした。水郷潮来の水に映るコスモスもまた美しく、少しのロマンも思う句です。

特選句

賑わひの
海や川にも秋近し

レモン

日本は海に囲まれて海水浴場も多く夏は賑わうし、帰省して故郷の川遊びもまた楽しい。しかし盆を過ぎると、田舎の浜辺や川は地元の子供たちだけになり寂しくなり、秋の近くなるのを思う。都会に近い海ではまだ賑わうが、秋風と共に少なくなり、青いうねりにサーファーが二、三人居るのも秋を思う句です。

俳句へのいざない

第四回 季語と所感について

前回では和歌、連歌から松尾芭蕉、正岡子規等により、現在の俳句が生れたと申しましたが、今回は俳句の規則や詠み方について勉強して見たいと思います。

俳句は季語と、それを補完する語句から出来ている訳ですが、五、七、五の十七文字に制限したところに面白味もあります。俗な例えかも知れませんが、愛の告白でも「君の容姿、態度が好きだから…」などと言うよりも、「君が好きだ!」とズバリと言った方が力強く、思いも籠(こも)り感動します。「スキ」と言う二文字の中に、彼女の全てを含むわけです。従って俳句も十七文字の中に自分の見た事、感動した事、経験した事を含ませるのです。

しかし俳句は季語で五文字を使いますので、残りの十二文字では沢山の事は言えません。所以(ゆえ)に単語の様な言葉を探すことになります。例えば、有名な「夏草や兵どもが夢の跡」(松尾芭蕉)がありますが、「夏草」は季語で実景、「兵(つわもの)どもが夢の跡」は芭蕉翁の感想感慨でもあります。

これは芭蕉翁が、奥州藤原三代が滅び夏草の茂る平泉の地を尋ねた時の句で、夏草の季語に館も無く草原となった奥州の昔を偲び、兵達(つわもの)が国盗りを夢見て戦ったのを思い浮かべています。また季語の「夏草」と「夢の跡」が一句の中で補完し合って広がりや哀れも醸し出します。

私どもは芭蕉翁には及びもつきませんが、一つの季語に対して自分の今までの経験、見分知識を懸けて適切な語句を見付け一句としたいものです。また十七文字の五、七、五の文字は日本人の音感に合うので、昔からか歌謡曲の歌詞も五、七文字の組み合わせが多いのです。

相撲と同じで、俳句も十七文字の土俵の中で自然や人事を詠みましょう。そして一句に一季語、十二文字で自分の思いを詠みましょう。

秀逸句

今月の秀逸句

流れゆく
雲を見て居る初秋かな

アベ

夏の雲は積乱雲で入道雲だが、秋はカーテンの様な薄い雲や鱗雲が多い。浜辺か、堤防に座りゆつくりと流れる雲をただ眺める。故郷や過ぎた月日を思うこともある、少しの寂寥(せきりょう)にしみじみした句です。

立秋の
蝉も蛙も声変わり

コバ

夏は油蟬、みんなみん蟬など喧(やかま)しいが、秋になると法師蟬、蝸(ひぐらし)など鳴いて秋を思う。また蛙は気温が二十度以下になると鳴かないと言うが、立秋の頃はまだ少し鳴く。それらの声の変わりにも秋のきたの思う、面白い句です。

ななかまど
色づき初むる今朝の庭

マキ

七竈(ななかまど)は七度燃やしても燃え尽きないので、この名があると言われる。信濃など亜高山帯に多く、秋には紅葉が燃える様に美しいが、植木鉢などにも植えられる。美しい句。また最上級の備長炭の原木にもなり、花鋤樹(ななかまど)とも言う。

我が庭も
まばゆき程の秋の星

みく

星は年中見られて夫々に美しいが、秋から冬は空気が澄むので格別に輝き美しい。日本一は長野県阿智村(あちむら)で観光客も多い。しかし自分の庭の星も自分だけの星に思えて、少しのロマンも思う句です。

終戦忌
父の遺影のセピア色

ゆたか

セピア色は烏賊(いか=魚類)の墨のことで、昔はインクにも使われたと言う。今では白黒写真の褪せたのも言い、過ぎた日のロマンにも言う。戦後七十余年の今、色褪せた写真に亡父を懐かしむ。しみじみした句で私も亡父を思います。

秋立つや
浪が浪追ふ鹿島灘

ゆたか

盆が過ぎるとどここの海もうねりが出て、海岸近くになると崩れて飛沫を広げる。それは太平洋に台風など発生しやすからでもある。日々の生活は多忙だが、時には鹿島灘の幾重の浪をただ眺めるのも心安らぐ。大景の句です。

佳作

恋人に別れを告ぐる秋の風	ミニ	立秋の日暮に哀し蟬の声	ヨイチ
北浦の夕空を飛ぶ蜻蛉かな	ヒロ	秋の空秋刀魚の頃になりけり	あきら
コスモスの畑に遊びし幼き日	マコ	虫の音の聞こえてきたる夕べかな	チャコ
浜空に集まり舞える赤蜻蛉	めい	立秋や夏物バーゲン始まりぬ	しま
青天のコスモス畑あざやかに	あさ	素通りの出来ぬ本屋や秋立ちぬ	ゆたか
食事後読書も楽し秋夜長	のん	墓に這う蟻も開眼般若経	ゆたか
立秋の待ちし心に宵の風	ユキ		



私も生きてます ~我が回復記~ 「アル中のシゲ」の巻

第15回
最終回

消せない過去と最悪の経験が今は最高の価値に

酒におぼれ、親、弟、友人たちを泣かせ、苦しめ、裏切ってきた私。80kgあった体重は50kgを切り、精神も肉体もボロボロになり、社会から追放され、まるで行き場のないゴミのような存在でした。そんな社会のゴミと化した私を潮騒JTCは拾ってくれたのです。私はすべてを失い、もうなくすものは何もなく、薄汚れたTシャツに洗濯していない臭いGパン、少しの着替えの入った紙袋一つをぶら下げて潮騒JTCに漂着しました。私にとっての“どん底の底つき”です。

そうして私は潮騒JTCで生まれ変わったのです。ルールに従ってプログラムに参加し、学びのやり直しを一所懸命にやりました。ミーティングをはじめ様々なプログラムに参加させていただき、栗原センター長を手本に「学びとは苦ではなく喜びなのだ」「人は変わることができるのだ」ということに、潮騒に来て気づかせていただきました。どんなに頑張っても過去は消せません。でも私の消せない過去と最悪の経験が、今は最高の価値となっています。

狂気から正気に戻り、今は潮騒の仲間たちと笑い合えるようになりました。私が泣かせ、苦しめ、裏切った人々への埋め合わせはできていません。私には残りの人生を、お酒を止め続けていくことしかできません。受刑者への手紙の返信も2年半になり、1万通以上の手紙を書かせていただきました。スタッフになり、自覚を持ち、相手の身になって考えられるようになりました。自分自身を変えて、新しい生き方に踏み出せたのです。

これからも潮騒JTCの仲間たちの中で自分自身の回復、成長を日進月歩で見つめ続けていきます。潮騒での生活も4年3カ月が過ぎました。おかげさまで一口もお酒を飲んでいません。この先も仲間たちの力を借りて、断酒を継続して参ります。本当に私の命を救ってくれた潮騒JTCと栗原センター長には感謝です。せっかく生かされているので、仲間と共に寄り添って「今日という一日」に感謝して精一杯頑張る生きていきます。最後に、回復記を他のメンバーよりも長く書かせていただき、ありがとうございました。努力、忍耐、感謝。アル中のシゲでした。(終わり)



9月のバースデー

てつちゃん



2年6ヶ月、
まだまだ。

タケ



3年目指します。

ウッチー



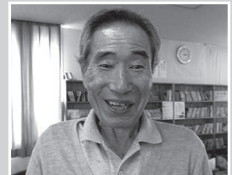
59才になりました。

ツル



55才になりました。

タロー



71才、
一からのスタートです。

マサオ



生きてることが喜びです。

モン



飲まないで河川は綺麗です。

コウ



このままで。

スミ



幾つになっても、
年はとりたくない

セラ



55才になりました。

ナカ



潮騒につながって10年。
まだまだこれから

バガ



がんばります。

トオル

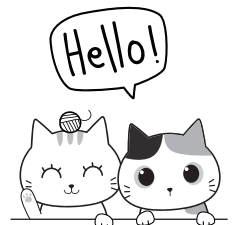


今日も一日、クリーンで

ワン



これからも頑張ります。



9月の行事

- 9月12日 潮騒俳句会
- 9月8・14日 秋元病院メッセージ
- 9月22日 潮騒家族会
- 9月29日 潮騒アディクションセミナー

10月の行事予定

- 10月13・19日 秋元メッセージ
 - 10月10日 潮騒俳句会
 - 10月19日 くぬぎの森 エイサー演舞
 - 10月20日 潮騒JTC 14周年フォーラム
- 10月はフォーラムがあるので家族会はありません。

献金・献品を頂いた方

(9月15日現在)

・金子 眞佐江 様

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。おかげさまで潮騒JTCは、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させていただいております。どうぞご理解のほどをお願いします。

編集後記という名の独り言

「なぜ潮騒で沖縄エイサーに取り組むの?」「メンバーに沖縄出身者がいるの?」。先の保護司会視察研修での質疑応答で、参加女性の一人から潮騒のエイサー(鹿嶋琉球太鼓)について質問を受けた。今や毎週末はほとんど出演依頼でスケジュールが埋まっている潮騒エイサー、そういえばなぜ始めたんだっけ? ▼僕の記憶では、潮騒JTCが鹿嶋市郊外のクリニック跡地に移り、入寮者が増え始めて施設として成長してきた流れの中で、安定的にミーティングが維持できるようになり軽スポーツや温泉入浴などに加え、レクレーションとして音楽活動が生まれたのが始まりだった ▼周知のように、音楽業界は潜在的に大麻などのクスリと縁が深いとされる。入寮者の中には過去にプロとして活動していたメンバーも登場するようになり、バンド結成の気運が生まれた。音楽好きのメンバーによる施設内での活動から、次第に「て〜ら祭」など対外的イベントにも出演するようになり、初期の潮騒フォーラムでは主役を張ったりした ▼一方、エイサーは第1回の潮騒フォーラムで、市原ダルクのメンバーが初めて入寮者や参加者に圧巻の舞台を披露、その躍動感に圧倒されたことを覚えている。その後、主流だったバンド活動が中心メンバーのスリップや自主退寮などで人員の固定化が難しくなり、宙に浮いた形となった。これにとって代わったのがエイサーだった ▼この時期、スタッフらが各地のダルクフォーラムに参加し、ここで演じられる「ダルクエイサー」に刺激を受ける場面が増えた。やがて農業隊リーダーのヒトシさんを中心に「自分たちもやろう!」という動きになっていったように思う。その後、地元の和太鼓演奏も加わり、ともするとマンネリ化して停滞気味の施設生活にあって、潮騒太鼓が施設を盛り上げていった ▼視察研修でも栗原センター長は「太鼓の響きがどこか回復を後押しする不思議な魅力というか、理屈を超えた力が太鼓にはある」と説明していたが、そうだと思う。合同での練習時間の確保など苦労は多いようだが、達成感や承認欲求が満たされるなど回復を下支えする効果があることは間違いなさそうだ ▼施設の性格からメンバーが固定しにくいなど難しさがある中、よくやっているなあと感心する。結果的にエイサーの活動が潮騒のPRや地域貢献に役立っていることを考えると、差別と選別につながるパワーゲームに陥らないレベルで、お互いに技量を高め合う「適度な競争」の意義は無視できないと考える。(市)

潮騒通信 どっこい生きてます! 2019年9月

Contents

- P ② 目指すは寺子屋兼ねた子ども食堂
- P ③ 潮騒人間塾「就労サポート・のだ」工藤 達(たつる)さん
就労支援の新たな認知プログラム
- P ④ エイサー・プログラム が 始まりました
- P ⑤ 山武地区保護司会が研修視察で潮騒に来訪
- P ⑥ 近藤恒夫さんメッセージ「失敗してもやり直せばいいじゃないか」
第3回：ロイ神父との出会いが自分の回復を目覚めさせた
- P ⑧ 潮騒14周年フォーラムの目玉はコレ!
- P ⑨ 「るみの家」家族面談の試み
- P ⑩ 60歳からの回復
新天地に移り「鹿嶋潮騒ダルク」の看板を掲げる
- P ⑪ 受刑者からの手紙
- P ⑫ しおさい俳壇 9月のお題「立秋」
- P ⑭ どっこい私も生きてます「アル中のシゲ回復記」/9月のバースデイ
- P ⑮ 行事予定 / 編集後記 / 献金・献品 / 目次



■ 編集・発行：

特定非営利活動法人
潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)
〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34号
〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10
TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091

潮騒アディクションビレッジ会館
(潮騒アディクション・ケアセンター)
〒314-0031 茨城県鹿嶋市宮中 4-4-5
TEL:0299-95-9991 FAX:0299-95-9992

E-メール k.s-darc@orange.plala.or.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>

